

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書 17 章 1-4 節＞

1 (1-2) 主を覚えて生きるなら、世の悪い誘惑に恐れる必要はなし！

「つまずきは避けられない」(1)の「つまずき」は元々は「畏の餌をつける棒」を意味しています。よって、イエス様は弟子たちに「私たちの所に私たちを罪（悪いこと）に誘うものがやって来ることは避けられない」と教えられたのです。このことから、「この世では罪の誘惑があるのは当然のことなのだ。だから誘惑者を責めるより自分が誘惑されないようになることが大事なのだ」、と考えたらいいことを教えられます。この考え方は、自分の罪を他人や世の中のせいにするところから解放してくれます。言い換えると、どんな誘惑にも負けないで向かっていけばいいのだという希望を与えてくれます。もちろん、それは聖書の神様をしっかりと覚えていきるようになった時に持てる思いです。この時も、イエス様は弟子たちに語られています。

その上でイエス様は、「だが、それ（つまずき）をもたらす者は不幸である」(1)と言われ、その不幸の大きさを 2 節の様な表現で示されました。これを読むと、「どんな不幸かは分からないけれども、他人を罪に誘惑したらもう終わりだな、救われ様がないのだな」と思われます。他人を悪いことに誘う罪から遠ざかろうと思う思いが強められます。いいことです。しかし、同時に、そういう罪を犯したらもう地獄行きだと言われているのではないことも知っておく必要があります。

2 (3-4) 信仰者が気をつけるべきは、人を赦せない姿をとること。

「あなたがたも気をつけなさい」(3)とイエス様は弟子たちに言われました。「ああ、他の人を罪に誘うことだな」と思います。しかし、その後を読むと「えっ？」と思わされます。弟子たちに「気をつけなさい」と言われている内容は、「私たちの赦しは十分か？」と問われている内容と言ってもいいでしょう。「罪を犯した兄弟を戒めなさい」と言うことも言われていますが、ここではそれ以上に、「その罪を悔い改めるなら、何度繰り返し犯しても赦しなさい」ということが強調されています。今日の箇所と同じことが記されたマタイ福音書 18 章では、「仲間を赦さない家来のたとえ」を主が語って赦すことの大事さを教えておられます (18:6-9 → 10-14 → 15-20 → そして 21-35 と展開される意味)。弟子たち (信仰者) が人を赦せない時、それは人を悪いことに誘惑しているのだということを肝に銘じておきたいと思います。